商いの新しいものさし

㈱商い創造研究所
代表取締役
松本 大地

第131回

官民協働による池袋の逆襲

山手線の西側にある3つの副都心のうち、渋谷と新宿は時代とともに面的に街が一新されてきたが、池袋は1978年に駅東側でサンシャインシティが開業した程度で、男性の色が濃い雑然とした環境のイメージが根付いていた。2014年、日本創成会議は40年に20～39歳の若年女性が5割以下になる基準から、全国896の区市町村が消滅可能性都市に該当すると発表した。その中で東京23区では唯一、池袋がある豊島区が消滅可能性都市になるという衝撃が走った。区では男性目線の負のイメージから脱却した女性に視点を合わせた街づくりを推進するため、「女性にやさしいまちづくり担当課」を新設、産学官が連携して持続発展する都市づくりに舵を切った。

16年、ホームレスが集まっていた南池袋公園がオシャレで心地よい居場所に変貌したことを皮切りに、18年の中池袋公園、19年に池袋西口公園のリニューアル、20年にはイケ・サンパークの開設と、4つの公園が人と街が交流する新たなスポットとなった。各公園をつなぐIKEBUS（イケバス）の運行、豊島区役所の池袋中心部への移転など複数のプロジェクトが推進され、エリアの表情が大きく変わっていった。この官によるハード整備と相乗するように、民間では「何度でも訪れたくなるまちづくり」を掲げ、周辺エリアの百貨店や専門店ビル、学校など計15の企業や団体が協力して「HANA CIRCLE PROJECT」の取り組みが行われた。「花とみどり」をテーマにした体験型ワークショップや花関連の販売展示、花の種をプレゼントする企画の旗振り役となったのがサンシャインシティである。

米ポートランドの古い建物の壁面にアーティストに作品を描いてもらう取り組み「Murals」

サンシャインシティは20年4月に実動部隊として「まちづくり推進部」を立ち上げ、地域全体最適の街づくりに向けて活動を加速した。企画運営に携わった「IKEBUKURO LIVING LOOP」では、サンシャインマルシェの開催やワークショップを継続することで、子供連れのパパママで訪れる若いママ達が増えるなどの光景が広がった。予想以上に短期間で共感の輪がつくられたのは、元々大ターミナル駅立地としてのリソースがあったことと、小さくても繰り返し実行したことと推察する。

20年7月、豊島区は内閣府が定める「SDGs未来都市」「自治体SDGsモデル事業」に認定された。消滅可能性都市からたった6年のスピードを持って、次なる高みを目指すことになった。池袋はどんな針路を目指すべきかを考えると、街は整然として清潔感を保つだけに注力すると、どこか面白みが足りなくなる。池袋は色々な世代が集まったハイブリッド性を持つ街であり、街の活気あるドラマ性は持ち味だ。池袋は多様な個性を認め、活用する多様性を重んじるダイバーシティのモデル都市になるのがふさわしいのではないだろうか。戦前から豊島区には美術家や詩人、映画俳優、立教大学生などが集まることで「池袋モンパルナス」と称された背景もあり、訪れる人に気持ち良いと感じてもらえるよう、街なかでのアートやエコを連続して仕掛けていくと、大きな街の伸び代が期待できる。いかに多様性を都市デザインに反映させるかが大きなカギだ。

米国オレゴン州ポートランドでは、13年から「アートタックス（Arts Tax）」を施行した。18歳以上で年収100000ドル以上の世帯の個人から35ドルを徴収し、小学校の美術と音楽での体験学習などの情操教育を潤す。また「ミュラル（Murals）」は古い建物の壁面をキャンバスにし、アーティストに作品を描いてもらう取り組みであり、アートタックスから資金提供がされる。古い建物がアートになり、アーティストも作品展示の場所になることで、アートフルな街並みが整備される好循環を生んでいる。

サンシャインシティ川上裕信まちづくり推進部長は「池袋のあの場所でプロポーズをした、あの店で誕生日を祝ってもらったという思い出の詰まった記憶資産を大切に育てていきたい」と語った。街と人が思い出を作り続けるには、商い人達による街全体が醸し出すホスピタリティが大きく影響する。人に人格があるように、街にはどのような人が来訪し、どのような思いを抱くのかで、街自体の品格がカタチ作られるからだ。記憶や時間が蓄積される愛おしい街になっていくか、それは永遠の課題であり達成目標でもある。